

## 木造阿弥陀如来坐像 1 軀

### 木造阿弥陀如来坐像

もくぞうあみだによらいざぞう

### 分野／部門

有形文化財／美術工芸品〔彫刻〕

### 所有者

宗教法人 宝樹寺(ほうじゅじ)

### 所在地

大阪市天王寺区城南寺町

### 紹介



### 木造阿弥陀如来坐像

大坂城築城の際の都市整備により営まれた、中央区から天王寺区一帯に広がる寺町街区には、現在も 200 あまりの寺院が軒を並べている。現在の寺町寺院のうち、約 8 割が浄土教と関連する浄土宗寺院であり、平安時代から江戸時代にかけて制作された阿弥陀如来像が、先

の戦災をまぬがれ、相応の数伝来している。本像はそのひとつである。一木割矧造(いちぼくわりはぎづくり)の彫眼(ちょうがん)像で、割り首をせず前後に材を割り矧ぎ、両体側を含めて根幹材から彫出する。穏やかで上品な衣文(えもん)の彫り口だが、部分的に翻波式(ほんぱしき)の名残を思わせる表現もみられ、頭部や体軀には量感もある。制作年代は平安時代、11世紀代とみられ、市域に伝来する希少な平安彫刻である。

#### 用語解説

**一木割矧造(いちぼくわりはぎづくり)** 一本の木を材料として作った像の干割れを防ぐため、制作途中で像を前後に割り放し、大きく内割をしてそれを再び矧ぎ付ける技法。

**彫眼(ちょうがん)** 木を彫りだして、像の目を表す技法。

**翻波式(ほんぱしき)** 平安初期の仏像の木彫にみられる衣のひだの表現様式。角ばった波と丸みをもった波とが、交互に規則正しく繰り返されるもの。